

大陸（南支）

傷痕いまだ癒えず

佐賀県 丸山 菊夫

一、入隊から任官までの経緯

私は、陸令第七條による志願兵として、昭和十六年三月二十日、現地より派遣された受領員に引率されて、独立歩兵第百大隊に入隊した。

駐屯地、南支那汕頭市にいた同部隊は、汕頭西南西二〇キロの潮陽攻略戦に出動中で、我々初年兵もこの作戦に参加した。

潮陽占領後は、この地で作戦警備に従事しながら初年兵教育を受けた。一期の検閲後、私は広東市郊外、

白雲山麓の中山大学舎跡の、南支下士官候補者教育隊に第四期生として入校、卒業後はまた元の部隊に復帰した。

その後伍長に任官、初年兵教育に携わりながら大岡寮付近の戦闘に参加した。昭和十八年九月十日、友軍部隊が圧倒的優勢な重慶軍の攻撃を受け、壊滅状態となり、主要陣地はことごとく奪われ、その部隊は組織機能を失った。

兵団長中村次喜蔵少将は、事態を収拾すべく潮陽の我が坂本部隊（長・坂本康市中佐）に出動を要請した。我が部隊は決死隊を編成、苦闘の末これを奪還した。私はこの戦闘で、敵の砲弾破片を右大腿部に受け、第六肋骨の骨折をし、決死隊員のため戦線離脱はできなかったが、作戦終了後に入院治療した。

占領後部隊はこの地区の警備を担当することになり、羊蟹作戦・仲秋作戦・磨石山付近の戦闘などに参加した。

二、初年兵受領の出張

昭和十八年十月十一日、昭和十八年徵集現役兵受領のため、長崎県大村の西部第四十七部隊に出張を命ぜられ、主計部将校と共に慌ただしく任務の途についた。台湾の基隆港で航空機搭載艦に乗って出港。途中、沖縄近海と上海東方の寧波で米軍機と潜水艦の攻撃を受けたが、傷付いた巨鯨のように荒れ狂い、満身傷となりながら、無事宇品に入港した。

三、入隊兵受領

年が明けて一月五日、入隊した現役兵を受領した。初年兵の基礎教育と並行しながら、救命筏の製作、ふか襲撃防止用のふき流し布の調達、遭難の場合の待避訓練など、一日も早く輸送ができるよう、その態勢づくりに奔走した。当時は制空権・制海権とも既に連合

軍側に掌握され、敵潜水艦は近海に出没し、これによる損害は計り知れないものがあつた。

このように緊迫した状況の中とあって、私は彼ら初年兵を徹底的に鍛え抜いた。強固な精神力と体力がなければ、遠く離れた戦地まで、遮断された輸送路の強行突破はできないと判断したからである。

四、南支に向けて出発

輸送船に乗り込むため大村の連隊を出発したのは二月六日であつた。列車が門司港駅に着くと、埠頭には数隻の輸送船が停泊していた。だがこの日は四十年ぶりの狂吹雪で視界悪く、海上は大しけとなり、このため出航は中止された。

五、民家に分宿

出航が延期されて乗船できなくなり、我々は門司港周辺の民家に分宿することになった。この頃は相次ぐ戦争のため国民は窮乏生活を強いられていたが、これらの家庭ではできる限りの款待をしてくれた。私は責

任者として、これらの家を一軒ずつあいさつに回った。

六、門司港出帆

翌二月七日昼過ぎ、波の静まるのを待って輸送船に乗り込むと一夜の民宿で兵士と親しくなった人々が大勢埠頭まで見送ってくれた。兵士たちは感激の涙をこぼしながら、見送りの人たちが見えなくなるまで、手を振って別れを惜しんだ。

我々が乗っている船は「みどり丸」といって、他の船より大きな船であった。やがて船が沖合に出ると、兵士たちは船倉の寝倉に下りて来て、再び祖国の土を踏むことはあるまいという感傷に耽っていた。

しばらくすると船は玄界灘にさしかかり、船酔の者が続出した。平気でいられる者は一人もいない。夕食どきになって食事している者は極く小人数である。私も歩くこともできない。だが私は引率者である。初年兵と一緒に船酔いしていたのでは格好が悪い。潮風に当たれば少しは目が覚めるだろうと、よろめきながら薄暗くなった甲板へ出ると、ウンウン唸りながら兵士

たちが転がっている。

こんなことではいざという場合役に立たない。この沈滞ムードを一掃すべく、全員を船倉に呼び戻して十気昂揚のため演芸会を開いた。短時間ではあったが、郷土色豊かな演芸や、隠し芸が披露されて、ゲラゲラと腹を抱えて大笑い、しばし船酔いを忘れて楽しい一時を過ごした。

夜になっても雪は降り止まず、寒気は一層加わった。その中で嘘のように中空は月が明るかった。「万里の波濤を乗り越えて南支戦線へ征く」といえば勇ましいが、初めて船に乗って、祖国を離れる感傷と玄界灘の荒波に酔った兵士たちの気持ちはさぞ複雑であったに違いない。船は敵機や潜水艦を警戒し、完全灯火管制のうえ蛇行航行している。私は懐中電灯を持って船内を巡回した。海面は夜光虫が螢のように飛び交って、美しい光沢を放っている。

船内異状のないことを確認したので、不寝番の勤務者だけを残し、定位置に戻り横になっているうち、やがてウトウトと軽い眠りに取り付かれました。

七、敵潜水艦の魚雷集中攻撃

それからしばらくして、目を覚ますと外は風がビュービューと吹き荒れている。その中でかすかに「ボン」という異様な発射音のようなものが聞こえた。私はもしかしたらと耳を疑った。だが警戒兵からは報告はないし、船内の者はだれも気付いておらず、緊迫感に伝わってこない。これはつきり私の気持ちの高ぶりによる錯覚だと即座に打ち消してしまった。それから間もなく凄まじい爆発音が耳を貫いた。その途端「しまった」と思った。と同時に事の重大さに戦慄を覚えた。時計を見ると午前二時を少し過ぎていた。まだ船は九州の沿岸伝いに南下しているはずだから、まだ安全圏内だと安心していたのは私の不覚だった。海面は龍巻のような水柱が何本も立っている。敵潜水艦は「みどり丸」だけを狙っているのか、発射される雷管は的確に命中して、ズシンズシンと不気味な音を立てている。兵員輸送用に改造された五千トン級の貨物船だが、ほかの船よりひときわ目立っている。敵潜水艦がこれを見逃すはずがない。しかも最も狙い易い外側のコー

スをとっているのだから、ほかの船を見捨てて「みどり丸」に攻撃の焦点を絞っているのは当然だろう。

突如の魚雷攻撃に、船は大きく揺れ、船内の荷物は崩れ落ち、私も兵士も壁や柱にぶつかって転がっている。ドテツ腹に大きな穴が開き、そこから濁流が船内に流れ込んでいる。後部船倉から甲板までの階段は爆風で吹きちぎれ、その下には多数の死傷者が折り重なっているが、手の施しようがなく息が詰まりそうだ。衝撃によって覆いの取れたハッチからわずかに月の光が真つ暗な船内に差し込んでいる。その光線の中に甲板から吊られた縄梯子の下部が切断されて宙に浮いている。

甲板に出るにはこの縄梯子しかない。まさに命綱である。懸命にこれにしがみつき機械体操・鉄棒の尻上がりのようにして、ぐるりと一回転、やっと甲板上に出た。素早く、両手で口を覆うようにして船室に向かつて「敵艦来襲全員甲板上に集合」と叫んだ。

後から後から兵士たちが、船倉からはい上がってくる。だれも彼も度肝を抜かれている。たちまち甲板上

は黒々とした兵隊でいっぱいになった。顔を鮮血に染めた者、突如の異変に慌ててシャツだけしか着ていない者、救命胴衣を身に着けていない者、半狂乱になって泣きわめく者、ただオロオロしている者で、ごった返し一瞬のうちに阿鼻叫喚の地獄と化してしまった。

船倉から上がってきた者に指示して輸送指揮官のところへ伝令として走らせた。月の光を頼りに、甲板から繩梯子を下ろして船倉に残った者を助けようとするが、体力のない者はどうすることもできず、もがき苦しんでいる。船倉にはまだ相当数の者がいるようだ。これらに「しっかりとしろよ、今に助け出すから」といつて励ますのだが焦れば焦るほど真つ暗闇の中の救出作業は捗らない。

戦争の悲惨さを初めて体験した初年兵たちは、ただうろろうしてなすことなくして「班長殿、班長殿」と私を呼び続けている。

門司港を出港するとき船団を組んだ他の船は、潜水艦の攻撃を避けるため全速力で逃げ回っている。護衛している海軍艦艇も我々を見向きもしない。やられた

船より無傷の船を護るのがより重要なのだろう。

自力航行能力を失った「みどり丸」は完全に見捨てられ、広い海上に孤立してしまい、打ち寄せる波は真つ二つに割れた甲板を洗っている。輸送指揮官からまだ何の指示もない。恐らく指令室からメガホンで怒鳴っているに違いないが、それが沈没寸前の混乱状態の我々には届かない。

我々は歩兵である。地上戦闘には馴れているが、こんなに広い海に放り出されると、何もできない。まるで手足をもぎ取られたようだ。しかも船室に閉じ込められたまま一発の弾丸も撃たずに死んでゆく無念さ惨めさは計りしれないものがある。船の傾斜は激しくなり、海面は舷側すれすれのところまで迫ってきた。船が沈む時に起こる渦巻に遭わないようするため、いよいよ退船を決断する時がやってきた。

八、退船、漂流

私は独断で退船を決意して、これを命令した。しかし、私はまだ船内に留まって、まだ救出されていない

者に救出の手段を講じなければならぬ。私の命令で兵たちは甲板や仮設建物の屋根から一斉に飛び込んだところが、そのとき思わぬ事態が起きてしまった。海に飛び込む要領は「両腕を水平に広げ、両膝を曲げると水中深く沈まず早く浮かび上がる」訓練をやったが、間隔を置かないため、先に飛び込んだ者が浮かび上がるとき次の者が飛び込むため、その頭を直撃するので被害者が出てしまったのである。

声を枯らして飛び込ませてから「早く船から離れろ」と言いながら、甲板上を見ると、退船もせず、吊り下げられたままの救助ボートに大勢の兵がしがみついている。人間の心理はなんと奇妙なもの、助かりたい執念でこれに集中しているのである。まだ一人前の兵隊になっていないため、こういった異変に遭遇すると、教わったことなど何の役にも立たないのである。やっとロープを切って海面に降ろされた救命ボートは定員以上の人員でたちまち大波をかぶり、結局は海底に沈む破目になってしまった。

「みどり丸」も沈没寸前の状態になってしまった。

もう一刻の猶予もできなくなった。最後まで船内に踏み止まっていた私も早く脱出せねばならない。船倉で助けを求めていた者のことも気懸りで、後ろ髪を引かれる思いだが早く海に飛び込んだ者を指揮掌握せねばならない。「えいっ」とばかり飛び込むと波がうまく私を船から引き離してくれた。

それから間もなく、船は直角に船首を突き立て、二重、三重の渦を巻きながら海中へ消えていった。しばらくすると、重油、ドラム缶、マスト、箱類が無数に浮かび、漂流者に犠牲者が出た模様である。海に放り出されて広い海原には目標になる物はなく、静寂そのものである。

二月の東支那海は、荒れて凍りつくような冷たさである。体は感覚を失うほどになってきた。それに重油などの悪臭などもひどい。重くて大きな波のうねりが怖くて、不気味だ。漂流物に懸命にしがみついて泳いでいるが、バランスを失えばたちまち沈んでしまう。必死に泳いでいる積りでも、沈んだ船の位置からそんなに遠ざかっているわけでもない。

月の光で波頭が白く漂う。漂流している兵士の頭が黒く見える。近いようで遠く、絶望と不安が付きまとう。お互いが求め合うように寄つて来る。こんな広い海にだれがどこから救助にやってくるのだろうか。本当に我々は助かるのだろうか、大きな不安が襲いかかる大波と共に、子供心に似たとりとめのない感慨にひたるのである。

九、海に散った初年兵たち

戦争というものは一寸先が闇である。一体だれとだれが死に、だれとだれが生き残っているのだろうか。今まで救命胴衣を枕に、船酔いでうなりながら隣で眠っていた仲間がバラバラとなり、その生死すら確かめようがない。一波ごとに兵士たちは筏から脱落してゆく。出発前幾日もかかって作った救命筏も、我々の命を救う役目は果たさなかつた。救命どころか、この筏に運良く捕まった者でも、大きな波をかぶると転覆した筏の下から抜け出せず、命を失う者まで出る始末である。空腹と疲労が次々に押し寄せてくる。孤独と恐

怖感、それに睡魔が襲ってくる。地獄まさに海地獄である。

私は「もう少しの辛抱だ、みんな頑張るんだ。眠つたら死んでしまうぞ」と励ますが、その声も波の音に掻き消されて、遠くには届かない。何とかしないと犠牲者は増大するばかりである。救命胴衣を着けている者はまだしも、裸同然の者は、一瞬の眠りが命取りになる。浮かんでいるバランスを失うと、ブクブクと沈んでしまう。こうなると、どうもがいても、あがいても、どうにもならない。こうして死んでゆく兵士たちが最後に残した言葉は「お母ちゃん万歳」であつた。これが嘘偽りない人間の姿だと思つた。私は死ぬことは許されない。どんな状況下にあつても必死に生き抜いて、一人でも多くの生存者を最前線に送る義務があるのである。

私は「軍歌を歌え」と叫び、「勝ってくるぞと勇ましく、誓つて国を出たからは」と露宮の歌を歌い出した。しばらくして私の周囲にいた者の中からようやく、途切れ、途切れにかすかに歌う声が起こつた。すると、

今度は「あーあ堂々の輸送船、さらば祖国よ栄えあれ」の歌声が波の音にかき消されながら聞こえてくる。私は「よしつ、これで大丈夫だ」と安心した。

五時間も冷たくて、しかも大荒れの海を漂流して精魂尽き果てようとしているころ、やがて東の空が白みはじめ、ながい暗黒の世界から開放された。腕時計の泥を払いのけて見ると、漂流を始めた二時十分で止まっている。

空には厚い雲の影から太陽が覗く。その光に輝く海は薄暗くまるで悪魔の海のような。私はこれで助かったと思つた。するとその時、突如「班長殿、救助船が」とその方向を指差した。私たちは最後の力を振りしぼつて、手を振つた。我々を護衛していた駆逐艦がどこからなく姿を現わした。

そして輸送船が沈んだ辺りを旋回しながら爆雷を投下し始めた。我々は呆気にとられてしまった。我々を見たのか、見ないのか全く無視したかのようにして、その度にズシンズシンという爆発が漂流している者の空き腹に重く響き、そのため犠牲も出る始末である。

このときほど溺れかかっている我々は、海軍さんを憎く思ったことはなかった。

爆雷の投下を終えた駆逐艦は敵潜水艦がないことを確かめた後、ようやく西瓜が水に浮いたようにブカブカ浮いていた我々の救助を始めた。

十、海軍艦艇に救助さる

水兵さんたちは私たちを一人ずつ艦上に引き揚げる往復ビンタを食わせて、「元氣を出せ」と活を入れてくれた。しかし精根を波間で使い果たし、艦上に収容され、やっと「助かった」という気の緩みから、息を引き取つた兵士が屍体となって並んでいる。遺体に合掌し私は空を仰いで嘆息した。

そのすぐあと不覚にも「幻覚」が私を襲つた。敵兵が接近してきて私を捕らえようとするのである。恐怖とわびしさが交錯し、舌を噛み切つて死のうとしているところで目が醒めた、一体どのくらいの間だったのであろうか、自分には分からない。

傍らには濡れネズミのままの兵士たちが私を案じて

立っている。このとき私は兵員輸送の困難さと、これから先のことを考えずにはいられなかった。

十一、海軍さんに感謝

寒中の海に漂っていた体は凍りつくように冷たかった。水兵さんたちは乾いたタオルで私たちの体を、摩擦して感覚が戻るようにしたり、着替えを手伝い、体が温まるように、熱い湯茶や、ミルクを飲ましてくれた上、交代で艦内の風呂にも入れてくれた。これでもうやく生きた心地がした。そして海に漂っていたときの憤怒は嘘のように消え、素直に「海軍さんありがとう」と感謝した。

十二、遭難に関する付随事項

私たちが遭難したのは鹿児島島の沖合であったことが判明した。薩摩半島の沿岸地帯には遭難した兵士の遺体が多数漂着したという。これらの遺体は新しい軍服を着た一つ星の新兵たちで、その内ポケットにはまだ封を切らない餞別袋が入っていた、という。そういう

噂を耳にして、私は耐えられない気持ちになった。

十三、秘密保持のための隔離

駆逐艦内で手厚い看護を受けた我々は別な船に乗せられて鹿児島市外の古野陸軍演習場兵舎にひとまず収容された後、原隊の大村に戻った。そのときは私服憲兵がついていた。憲兵隊は我々の流言飛語を警戒していた。

大村の連隊では「伝染予防」といって我々を屯営の兵隊と区別して武道場に隔離した。板張りの道場には暖房もなく、たった二枚の毛布が支給され寒さを凌いだ。まるで罪人扱いである。我々は好んでこうなったのではない。まだ体力を回復していない兵隊たちを切捨てご免といった仕打ちに、私は涙をもって耐えた。そして一日も早く南支の戦列へ復帰したいと念願した。

十四、母の祈り

私の母は毎晩のように、伴の私が水に溺れている夢を見たので、何か異変が起きたのではないかと心配し

神に祈っていたという。当時は「コックリさん」という方式が流行した。畳の裾に箸を立て、その倒れ具合で吉か凶を占うという原始的なものであったが、このように神に継がりたい気持ちだったのだろうか。

十五、激務に倒れて入院

遭難時の負傷個所が痛み出した上、高熱と食欲不振、身体倦怠感、発咳、胸腹痛などの症状に悩みながら大本営へ提出する戦闘詳報の作成など山積みした書類の作成に追われていた。

そんなある日、呼吸困難を伴い意識不明の状態で陸軍病院に担ぎ込まれた。症状も一応安定したので退院を申し出ると、病院長・棟田博軍医中佐から「死んでもよいのか」と叱られた。しかし主治医の軍医さんは優しく、「安静にすれば治るからもう少しの辛抱だ」と励ましてくれた。私が入院してからも憲兵がやってきて言動を監視した。両親とも連絡をとりたいが、こんな状態ではどうすることもできない。私は病院長が「死んでもいいのか」といったことが重く頭にのしか

かっていた。自分の病状が知りたいと思いい夜間そつとカルテ庫に忍び込み診療記録を見た。

すると、私の病名は一過性の肺炎ではなく縦隔瘍胸膜で治療期間六カ月、兵役免除該当と記録されてある。これを見て失望したが、たとえ我が身はどうなろうとも、この出張命令だけは達成せねばならない、という執念に燃えた。

十六、出発準備完了

がむしゃらに退院を願って、病院側も止むなくこれに応じてくれた。そして私は再出発準備に没頭した。遭難による欠員補充として四十歳過ぎた人たちが入隊してきた。妻帯者で子供がいる父親たちである。これからこれらを教育しながら最前線まで引率するのである。

出発に際し気がかりなのは、遭難死した人々に線香の一本も供えられないのがとても残念であった。

十七、上海に向けて出発

昭和十九年になると、私たちの遭難以外にも輸送船の被害はいよいよ増大していった。そして兵員輸送についても計画が変更された。私たちの輸送船は、門司港を出帆して黄海を経て、ウースンに入港、上海に集結して仏印へ通ずる鉄路の完成を待つて南下することになっていった。しかし、広西省桂林方面の作戦が、米支協同の手痛い反撃に遭い、鉄路完成の見通しがつかなくなったので、上海輸送に頼らざるを得なくなった。召集された兵たちはこれから氣候風土の異なる異国で生活するのだから、余程気持ちを引き締めていないと病気をする。

私はこの人たちには温情を持って接した。年齢的に見てすでに限界を超えている、彼らを鍛えることはせず彼らの社会的体験の長所をうまく取り入れた方が、より効果的だと思った。船舶部隊への配船交渉の結果、台湾行きの船が確保できた。いよいよ出発だと思ったが、病弱兵をどうするか悩んだ挙げ句、このまま上海第一陸軍病院に入院させることにした。

十八、台湾目指して

上海から高雄までは、米軍機の空襲が心配されたが悪天候下の航海だったので難を逃れた。入港してまず感じたことは、相次ぐ米軍機の空襲で、港湾施設は廃虚と化し、その面影はなかった。

南方基地へ往来する輸送船団の中継基地といわれる高雄港の湾内には、何万トンと思われる大型船舶が大破、赤茶けた残骸をさらけ出している。これを見ると、日本もそう長くはないという気持ちを打ち消すことはできなかった。

十九、香港へ向け出港

高雄までは損害なくやってこられたが、これから香港までが問題である。果たして跳梁する敵機や潜水艦の目を逃れることができるだろうか。まして護衛艦なしの単独航海だから尚更である。私たちの船が入港しようとしたとき、香港・九龍一帯は大空襲に見舞われた。とくに入港中の船舶は壊滅的打撃を受けた。香港は水上生活者のサンパンが有名だが、彼らの多くの船

もその巻き添えをくって沈んでしまった。この地には約二カ月滞在した。

二十、香港から汕頭へ

最後のコースは小型ポンポン船に分乗して渡ることになった。ポンポン船をかき集めるには総督部も協力してくれたが、結局この船も不足して、虚弱な兵隊は香港の病院に入院させることになった。残留することになった兵士たちは、「折角ここまで来たのだから是非同行させてくれ」と私の手を握りしめて口惜しがった。

既に大陸沿岸は制空・制海権は米支側にあったので昼間は島陰に退避した。夜は夜で敵潜水艦の出没を見たが、この危機も通り抜けて、無事汕頭に上陸することができた。

二十一、大任を終えて

一年以上の歳月を要した初年兵受領の出張任務は、これらを所属隊に引き渡し、その任務は完了した。極

度の緊張と異状な昂揚感は帰隊してもなじまず心の渴きに悩まされた。

私が初年兵受領に出発した昭和十八年の南支戦線は、断然日本軍が優勢だったが、わずか一年間のうちにアメリカ空軍の直接介入によって、日本軍の要衝は次々に奪回された。

二十二、終戦直前までの状況

その後、部隊は「十九暮揚陽勘定作戦」「湘桂作戦第二期」「南部粵漢鉄道打通作戦（警備）」「二十冬掲普勘定作戦」に参加した。

この作戦は米軍大陸沿岸地上陸必至を想定し、その前に重慶軍を撃滅しておかないと、前面・背後の挟み撃ちに遭うことを避けるためのものであった。以上の作戦で部隊は、汕頭・潮州・揭陽・恵来・広東・新会・江門と移動転進した。

広東では、内地から増援された波潮部隊を加え旅団編成（独立混成第十九旅団長・陸軍少将近藤新八）から第三百十師団となり、初代師団長は近藤新八中將が

着任した。これによつて通称名も「潮兵团」から「鐘馗兵团」となった。

二十三、敗戦・武装解除

私たちが敗戦を知ったのは昭和二十年十月末であつた。それまでは、敗色の影は忍び寄っていたが、我が「鐘馗兵团」はまだ十分な戦力を保持し、勝ち戦を進め、敗戦後も戦争継続を主張したが、南支派遣軍司令部の説得に応じ停戦した。武装解除後は羊額の集中営に入り、捕虜生活を余儀なくされた。収容所ではすし詰の雑居房で空腹に悩まされやるせない気持ちだつた。

二十四、強制労働作業

日常は道路清掃の傍ら自活のための農作業に従事していたが突如、河川堤防構築を指令された。広東周辺は毎年のように水害に遭い、人命および農作物に被害があるためこれを補強するものであつた。作業現場の住民たちは、我々に「日本鬼とか戦争犯罪人」といつて投石や生唾を浴びせて作業を妨害した。作業は土砂

運搬や腰まで水につかつての重労働で、日々ノルマを課し達成できないときは、作業時間延長や主食の減配等の措置がとられた。これに対し我々は敗戦国民として罪の償いをさせられているのだと思つた。いよいよ堤防が完成した。自慢できるほど立派なものだつた。住民たちもこれを見て喜び、我々が引き揚げるときは、手を振つて別れた。

二十五、復員船上の出来事

戦争が終わると住民たちの日本軍に対する戦争責任の糾弾が始まつた。満州事変以来続いた戦争の物的・精神的苦痛に対する代償であつた。これが過熱して暴動化することを懸念した蒋介石総統は「既往をとがめず徳を以て怨に報いよ」と自重を促した。

広東地方は抗日思想が強烈で、しかも支那側接收司令官が広東省出身の張將軍であつた。張將軍もこの住民感情を無視できず、遂に南支派遣軍司令部田中久一中將をはじめ將官六名を含む四十八名が戦争犯罪人として処刑された。

屈辱の年が改まって翌二十一年になると、我々南支派遣軍にも待望の復員輸送が始まった。早くても十年はかかるかと覚悟していたので、この喜びは大きかった。我々は強制労働作業を終え現場から二日かかって乗船場所に集結した。

日章旗を船尾にひるがえし迎えに来たのは、アメリカ軍の上陸用舟艇を改造したりバテーター型輸送船だった。支那官憲の戦犯追及の手は復員船まで及び、厳しい検索を受けた。だがこの摘発は顔が似ていたり苗字が共通していれば、文句なしに捕らえるといういい加減なものである。身に覚えがないのに、彼らは勝者の奢りから敗者を裁くという執念みだいなものがあつた。タラップを駆け登って船室に雪崩れこもうとしている。このとき埠頭で、復員船の出港状況を見ていた師団長近藤新八中将は、これ以上戦犯容疑者を出すまいと「戦犯はこの近藤だけだ」と昇降口で双手を上げて立ち塞がった。

將軍の手を払いのけ、強行に容疑者を連行しようと意気込む彼らとの論争は、ついに乱闘となり、彼らの

銃剣でこづかれ、叩かれ閣下はひるむことなく毅然として、復員船を出航させた。この状況を船室から目の当たりに見ていた我々は將軍の部下を思う態度に胸がつまる思いがした。

それまで「部下の帰国を見届けるまでは」と戦犯としての逮捕を強硬に拒否していた將軍は、その後出頭して処刑されたそうである。処刑の日、支那側憲兵隊が目隠しをすると、これを断り泰然として刑を受けた。最後に残した言葉が「これで部下に面目が立つ」であつたとか。近代まれに見る武將の姿を私はいつまでも忘れない。

二十六、遭難者の消息を訪ねて

昭和二十一年四月、浦賀に上陸した私は、薩摩半島の沖合で遭難した人々を調査した。そのとき関係機関は、復員者の対応に忙殺され、行方不明者や、生存者の調査までは手が届かず、戦時中の資料は、占領軍の進駐ときに焼却したとかで、私の調査は行き詰まってしまった。

あのとき遭難した兵士たちには「南西諸島で戦死」の広報と遺骨箱には氏名の書いた紙片だけだったであろう。

二十七、忘れ得ぬ二月八日

あの遭難で有能な人々を多数失った。私はこの日の出来事は決して忘れることはできない。あれから五十年も経ったが、今でも海に溺れて助けを求めている彼らの姿が目には浮かぶ。

私もあのとき受けた傷痕が痛み疼くとき、まだ戦争という不気味な鎖につながれているような気がしてならない。

敗戦以来五十年、もうあの戦争の悪夢は払拭できたという人もあるが、あの悲惨な結果は永遠に消えるものではない。こんなことから私の戦後は未だに終わっていないといえる。

そうでないと、無念さを訴えることなく死んでいった兵士たちの御霊は浮かばれないからである。

二十八、平和を求めて

我々が経験した戦争は、小銃の撃ちあいや旧式の大砲によるものであったが、今日ではボタン一つで遠距離の拠点を粉砕する新兵器の開発によって、戦争は全人類を滅亡することになりかねない。

世の中が平和であればあるほど、平和の尊さを語り継がねばならない。ところが、最近の情勢は、戦争への足音を身近に感じている。

秃筆を撫で撫でして書いたこの記録は、私の数多くの戦争体験の一断面である。戦争がいかに人間性を無視し、不幸をもたらす非人道的行為であるかを、戦争を知らない世代の人々に理解して貰いたい。

そして空虚な平和論だけでなく、しっかりと大地を踏みしめた平和を実現していただきたい。これが私の念願である。